



中国 新 声 代

ふるまいよしこ



集広舎

連岳

コラムニスト、ブロッガー

「公民社会の形成とは必然的にすべての要因の成熟を意味していて、そこには政府の要素も含まれる。もし政府がそれを受け入れなければ、どんなに公民が成長しようとも何も起こりえない」



連岳 (Lian Yue)

一九七〇年福建省生まれ。大学卒業後、教師、検察官から、広州発行の人氣紙「南方週末」記者となる。その後、觀光都市である同省アモイ市コロンス島に移住、コラムニスト生活を始める。二〇〇七年に起こった同市の化学工場反対運動「海滄PX事件」において、市政府の情報封鎖にもかかわらず、インターネットとブログを使った情報発信の中心となった。二〇〇八年のチ

——コラム執筆をやめてしまったんですね。ほかのペンネームを使ってもダメ？

連岳 名前の問題じゃないんですよ。ある種の話題に触れることができない、振り返ってはならない、マイナス面を語ってはならない。くだらないことしか書けないなんて、時事コラムニストにとっては人格分裂。

今では新しいメディアが生まれてますからね、しばらくやめても大丈夫。ぼくのプログには一日当たり四、五万の読者がいる。一人だけの小さなメディアですが、社会の批評機能は達成できる。原稿料は出ないけれど批評家としての機能は損なわれませんから、残念だという気持ちはないですね。

ベット騒乱、そして四川大地震でもブログを通じて政府系メディアが流さない情報を提供し続けた。しかしその後、「新聞のコラムでは書きたいことが書けない」と規制を受ける時事コラムの執筆休止を宣言、現在はブログ、Twitterなどのインターネットツールを使った情報発信のほか、上海の雑誌などに恋愛コラムを連載している。
ブログ <http://www.lianyue.net/>

——今年中国ではさまざまな事件が多く起こり、人々の気持ちも大きく揺れましたね。地震前には四川省の彭州でもPX（パラキシレン）工場を建設するというウワサがありました、その後消えた。中止になったんでしょうね。

連 立案はできないはず、明らかに地震層の上に作るという話でしたから。地震騒ぎにまぎれてあまり注目されませんでした、国の環境保護局が彭州の石油化工基地全体の再評価を行うというニュースも流れていました。

——PX工場建設計画中止後、アモイ（厦門）ではなにか別のプロジェクトが立案されましたか？ もともと政府にとっては大事な税收予定だったわけ。

連 アモイはもともと豊かな都市ですから、PX工場がも

たらずはずだったのは税収のわずか三％ほど。とても小さな割合ですから、ほかのプロジェクトで埋め合わせが可能なんです。

——でも最近、市内の工場も移転させ始めたと言いました。PX計画が中止になってからアモイ政府がそんな決定をしたんですか？

連 つまり、あの時点ではつきりと都市の位置づけが決まったということなんです。アモイ市民によるPX工場建設への反対は、この都市は基本的に重工業化路線を取らないと言ったに等しいんですから。

——それにしてもすばやい決定ですね。六月に反対の声が上がリ、十二月に建設中止となった。その間にアモイの産業発展計画全体が見直された、ということですか？

連 非常に珍しい例ですね。だからこそ多くの人たちが、これが公民社会の第一歩になるかもしれないというし、ぼくもそう思います。

その後起こった、上海のリニアモーターカー建設反対の「散歩」、そして四川省の彭州石油化工工場建設反対の「散歩」、どれも公民たちが彼ら自身の意見を表明したわけで、彼らはそうやってそれがそれほど危険なことでも、また彼らが想像したほど恐ろしいことでもない、と考え始めた。彼らもそうやって学んでいるところなんです。

——PX建設反対「散歩」で考え方を変えるなんて、アモイ政府は開明的とも感じますが？

連 いえいえ、今回の大規模な「散歩」は一九八九年（の天安門事件）以来最大規模の「散歩」、つまり最大規模の街頭デモだったんです。

実のところ、去年の五月のアモイには非常にぎりぎりした雰囲気が漂っていた。「散歩」呼びかけの携帯電話のショートメッセージが発信されていたから。「散歩」の後、アモイの政府はかなり恐ろしい言葉を並べた評論文を広範囲で発表し、反対運動を国内外の反動勢力や少数人数のひとたちが煽動したものと決めつけた。その時の口調といったら天安門事件後に人民日報が発表した社説とはば同じ。

その後の動き、計画の動向、さらにはこの街の位置づけ、公民たちが表明した意見の受け入れなどとは実際のところ、アモイ政府の決定によるものではなかった。だから政府が開明的というわけではないんです。

——ならば、なぜ後になってすべての化学工場の移転を決めたりと、行政計画全体が変更されたのですか？ すべては市民の力によるものだった、と？ がちがちの力でぶつかり合うと普通は激しい衝突が起こるものですが、アモイではそれが起こらなかった。

連 ええ、だから両者が成長している。政府も前進してい

る、それは間違いない。

もちろん、まず市民が非常にすばらしい方法でその態度を表明した。あの二日間の大規模なデモ行進では最も多いときで少なくとも二万人が参加した。アモイ島の人口は百万人に満たないはず。なのにそれが二日間続いたんですから。

振り返ってみても、たとえ政府の立場に立つて眺めても、市民たちの「散歩」にはケチのつけどころがなかった。彼らは全行程で公民としての節度を守り、激しいスローガンを叫ばず、ゴミを散らかさず、学校や病院に差しかかると自然に声のトーンを下げた。政府への批判についても、建設プロジェクトの評価要求だけに徹底し、過激なほかの要求はしなかった。それは非常に高い公民意識を持った運動でした。

——この「散歩」はそのときにアモイで使われ始めた言葉ですよ？

連 ええ、アモイ市民がああのに作ったんです。今ではどこでも「デモ」とは呼ばず「散歩」と呼ぶ。上海ではさらに「逛街」(街歩き)とか「購物」(ショッピング)なんて言われるようになったし。ヒトつて頭がいい(笑)。

——それを取り締まるわけにはいかない(笑)。
連 でも、もし相手が非常に極端で野蛮な政府だったら、

公民がどんなに成長しようとそれは彼らにとつては頭が痛い存在でしょ？ つまり、公民社会の形成とは必然的にすべての要因の成熟を意味していて、そこには政府の要素も含まれる。もし政府がそれを受け入れなければ、どんなに公民が成長しようとも何も起こりえない。だからぼくは、アモイの経験は全体の結果であつて、政府内部のシステムも成長しているという意見に賛成なんです。

——PX事件以前のアモイ政府はやつぱり他の都市の政府に比べて開明的だったんでしょうか？ というのも、わたしは今回初めてアモイに、コロンス島に来たんですが、街を歩いていて感じたのはアモイ政府はうまくこの土地を利用しているなあ、と。

たとえば、今わたしたちが座っているこのコーヒーストップのように古い洋館を若い人に貸して、こじんまりとした、気持ちの良い空間として利用させる。こんな考え方は他の都市、たとえば香港でもあまり目にしません。さらに古い洋館の多くが修復中なのを目にしたし、これが北京ならば取り壊して新しい住宅を建ててしまえ、ということになる。

つまり、アモイ政府にはもともと、この土地を愛し、この文化を愛し、ここに暮らす人々を愛する、そんな伝統的な基礎があつたのでしょうか？

連 いいえ。開明的な政府なら、中国という大地図でいえば広東省あたりの政府がそうでしょう。（アモイ市が属する）福建省は全体的に見ても比較的保守的です。

十年前のアモイは今よりもっと美しくあったんですよ。鷺江賓館のあたり、旧市街はそれは美しかったです。でももう取り壊されてしまった。なぜこのコロンス島で取り壊しが行われないのか？ それはまず経済発展が進んでいないから。古い建物が保存されているのはそれが重要な観光要素だからです。コロンス島でも以前不動産開発が行われたことがあったんですが、売れなかった。というのも、多くの人たちがこの生活は不便だと外へと引越して行ってしまったから。

ぼくなんか、この暮らしは非常に気持ちがよくて、中国でもほかにないくらいいいところだと気に入っています。車も走っていないし。このコロンス島には中国の文化的な要素がたくさん詰まっています。

——たとえば？

速 まず、ここはもともと早い時期の租借地で、当時は数十カ国がここに領事館を開いていた。そして非常に多くの音楽家が生まれたところでもある。そんな文化的ムードにたつぷりと包まれた島で暮らしていると、アモイだろうが広州や上海、北京だろうが同じように暮らせそうです。ぼく

なんかまったく不便は感じていなくて、ここから街に行くにも最大三十分もあれば大丈夫。

だからね、人って工業社会に慣らされちゃってるんだなとよく思いますよ。毎朝事務所のあるアモイ島へ出勤するにも最大三十分程度を余分に見ておけばいい。飛行機に乗るにも一時間あれば空港に着いちやう。どこが不便なの？（笑）雨の日に通りを歩くと植物の香りが充満している。「ああ、幸せだなあ、もう最高！」（笑）つて、ぼくはものすごくここが気に入ってます。

——こんな、気持ちが良くてのんびりしたところで暮らしている人たちがなぜまた「散歩」に駆り立てられたんでしょう？ 中国の社会では一般的に化学物質がからむ話題にはあまり人々は関心を寄せませんよね。というのもその詳細が公開されないのです、どんなふうに生活が脅かされるのかよくわからないというのがある。あなたのブログにも、「流言に耳を貸すな。専門家のやることだ。専門家も政府もすでにアセスメントしたんだから問題ない。何を反対するんだ？ がたがた言うんじゃない！」なんていう書き込みもあった。なのになぜ、これほど多くのアモイの人々の注目を呼んだんでしょう？

連 閩商人（福建省の南部地域出身の人たち）の性格なんです。閩南人は見たところ、お茶ばかり飲んであま

り話もしないように見えますが、閩南地区のアモイや泉州といった地域は昔から商業の地域で、コロンス島も中国でもっとも初期には富豪島だったんです。閩南人が南洋でお金をもうけてここに住宅を建てて暮らしていて、そんな閩南人は行動力に非常に長けた人たちなんです。言葉数は少ないですが、その表情とは違う心のうちの思いを持っている。それが一つ。

二つ目は、なぜ市民が「参加しなければ」と信じ、「政府が言うことは必ずしも正しくないと発言しなければ」と思ったのか。それは以前に趙玉芬さんや袁東星さんたちといった知識人が大量の資料を準備をしていたことと関係しています。もし彼らがいなければどうにもならなかった。最初に彼らがそれを声にし、その後ゆつくりとメディアが続いた。広州のメディアや他の街のメディアが、です。

——アモイ市民は市外のメディアが大きく報道するようになって初めて事態の危険性を知ったのですか？

連 そうです。市内のメディアには報道が許されなかった。政府はプロジェクトを進めようとしていたんですから、報道も批評も許さなかったんです。

——その結果、アモイ市民が刺激された？

連 公民社会は緊密な関係にある機械みたいなもので、どの歯車が欠けてもダメなんです。だから、趙玉芬さんや袁

東星さんという知識人の存在は非常に重要です。彼らが建設差し止めの議案を提起し、科学的に計画が間違っていると論証したことは大きかった。その後のメディア関係者の参与も大事なことで、専門的な知識を持つ人たちの声をさらに多くの人たちに届けようとブログやメディアが動いた。さらにもっと多くの人に知らせたこと、それも重要でした。

そして最後に、もし一般の市民が動かなければ何の意味もない。市民たちが携帯電話のショートメッセージや「散歩」といった方法で広く彼らの「不賛同」を示したこと、これも大事なことでした。そして「散歩」の後で、たとえば政府が組織した環境アセスメント報告に市民が参加の意志を示し、市民は発言の準備をする、どの段階も欠けてはならなかった。

その過程では、あなたも触れたような、「何をやってもダメさ」「政府が一番なんだ」といった、非常に大量の、非常に大きな声も上がりました。それは長い間、こんな權威主義的政府のもとで暮らしてきた人間にとっては自然な気持ちなんです。ただ、何を言ってもダメであろうとも、多くの人たちが「おれはそれでも参加する！」と言い、個体の小ささなんて気にしなかった。

公民社会に最も大事なものはこれなんです、「オレが一番！」「声をあげたい！」「オレの言っていることを聞いて

もらおう」とすること、他人が「無用だ」と言っても声を上げた、自分を信じようとする事。

——三月から六月に「散歩」が実施されるまでの間に、あなたがたはどんなふうにそんな理性的な「散歩」の準備を進めたんですか？　たとえばあなたはブログ、コラムでみんなに……ちよつと聞こえは悪いですが、どんなふうに行進するよう市民に「教えた」んですか？

連 公民の理念、つまり自分が誰であらうとも「発言したい！」と思うこと、それはたかが半年ででき上がるものじゃない。いつごろそれが始まったのか、ぼくには分かりません。

でもぼくは経済学で言われる「中産階級が政府の力を決定し始める」という見解に同意しますね。あの一、二万人はまず一九八九年の天安門事件とは違った。あの頃はみな学生で情熱と理念がみなぎっていた。しかし、今回は中産階級です。中産階級の特徴とは何か？

彼らは理性的であり、情熱を発露させたいわけでもなく、パーティに集まったわけでもなく、「まずは問題を解決しなければ！」という自然な、理性的な枠組み、問題解決の枠組みを備えている。中産階級がなぜ理性的なのかというと、彼らは社会生活でそんな基礎を構築しているから。日ごろからそうやってビジネスをしてるんですから。

——中産階級の生活にはそんな基礎ができていない？

連 ええ。だからまったくの組織もないまま、突然二万人のデモが起こったとはいえません。暴力化する可能性もあった。というのも、百人の人間が暴力で解決しようと思えば、そのシステムは崩壊してしまう。

あの二万人のうち一人もそうしようとはしなかったということは、つまりあの二万人は成熟した人たちだったということになる。二万人の成熟はつまり、彼らは心の奥底にそんなパワーを持っているという意味で、つまりそれは主に彼らの中から出てきたパワーであって、メディアの教育や、専門知識を持った人たちによる教育の結果でもなかったのです。彼らはただ自分の本分を守っただけだった。

——つまりお互いが影響し合った。

連 そうそう、すべてが結果に総合的に結びついた。それは中産階級が成熟したという最高の評価だったわけです。

誰もあの二万人に「ああしろ、こうしろ」なんていう規律を定めたわけではなかった、本当に！　そこに現れたすべての人たちが、一人ひとり理性のパワーに従って自身の権利を行使したこと、これこそが中産階級の成熟の証明です。

——アモイ市民に中産階級が占める割合はどれくらいですか？

連 具体的な統計はありませんが、アモイにおける中産階級のパワーはかなりのものだと感じています。というのも、アモイは生活が便利で快適で、環境条件も整っているので転入者が多い移民都市なんです。転入者は多くの場合、その時点ですでに中産階級の実力を備えており、たとえば家を買ったりする。

さらにアモイにはもう一つ、これこそ他の土地にはないといえる要素があつて、それはアモイが台湾の金門島にとっても近いということ。アモイという土地では十数年、二十年前から台湾のテレビ番組を見ていたんです。これは非常に重要な点ですね。

というのも、それを通じてアモイの人たちは皆、民主というものがどのように運用されるのかを知った。(台湾の)総統選挙を目にし、議員選挙を目にし、国会討論を目にし、台湾で毎日のように行われている街頭デモを見てきた。彼らはこういったものを非常によく理解し、正常な社会とはどのように運営されるべきなのかを非常によく知っている。この点は無視できない、とても重要な要素だとぼくは思っています。

——広州の人たちが香港のテレビ放送を見ているのとおなじですね？

連 そう、そう！ アモイの人たちも基本的に台湾のテレ

ビを見る。彼らは二代に渡ってそんなふうに暮らしてきた。彼らは正常な社会というのがどんなものなのかを感じている。これが、アモイ以外の土地にはない、最も重要な点でしょう。

——政府内で働いている人たちもそう？

連 ええ。

——ということは、やっぱり開明的じゃないですか！

連 ええ、相対的にいうなら中国の南方は全体的に、文化的にも体制的にも北方よりは多様化していると言えますね、それは間違いない。

——つまり、アモイのPX反対運動は大学教授がいて、市民にも見識があつて、そして中産階級の成熟という多くの要素があつた……

連 最新の技術もあつた。携帯電話とか、インターネットとか、ブログとか。

——ということは、「散歩」に参加した二万人は主に中産階級だった？

連 ぼくはそう見えています、主に中産階級だった。というのも、当日はすべての政府系機関、政府がコントロールできる機関からは人が出て来れなかった。学校の門は閉じられ、学生は中に残るようにと命じられた。政府機関ではさらにすべての職員がオフィスに出勤するように求められた。



ならば、「散歩」に参加した）あの人たちは一体誰なのか？ 中産階級ですよ。人口比2%という数字は北京、人口一千万人の土地ならば二十万人という恐ろしい数になる。あの一、二万人という人数はつまり、（天安門事件後の）二十年來最大規模だったわけですよ。

携帯電話でショートメッセージを送り合っていた頃は、ほとんどの人が「口先だけだろう」と考えていて、まさか

あの日、本当にそこまでの人が出てくるとは思ってもいなかったんです。

——あなたもその中にいた？

連 ぼくはね、行かなかった。

——煽動しておいて行かなかった？（笑）

連 煽動もしてない（笑）。ブログでぼくが「絶対にあきらめない」と言い続けたのは、「メディア人として絶対に

あきらめてはならない」という意味だったんです。

——そのあなたもあそこまでの人が集まるとは思っていなかった？

連 全然思っていませんでした。五月十五日に「サウスチャイナ・モーニングポスト」（香港の英字紙）の記者が来たんですが、彼もぼくと同じようにショートメッセージを受け取っていて「無理だね!」と言った。彼は中国のことをよく理解していて、「六月といえましょうと天安門事件の周年に当たるから（いつもより警戒が厳しくなるし）ね」と。当時一体どれくらい人が集まるんだろうとみんなで言ってた

たくらいでした。

——今の中産階級といえば天安門事件を体験したわけでもないの、それは彼らにとって特には……

連 いや、今の中産階級はちょうど天安門事件を経験した人たちのはず。あの頃の学生が今では三十八歳から四十歳になっていて、ちょうど中産階級といわれる人たちです。

——だから、あのときの情熱を彼らは今、理性に転換することができた？

連 ええ、そして彼らは自分がやろうとしていることの結果をまず予想した。たとえば、ぼくなんか「散歩」の前に多くの人たちとすることについて話し合ったし。「治安処罰条例」なんかを伝言板に貼り付けて、「ぼくらの行動はどんな法律に触れることになるんだろう？」ってね。

「となると、拘留されても最大十五日くらいかな」などと心の準備をした。そして「やつぱりぼくは行く。捕まって十五日間拘留されるかもしれないけど」……すべて秤にかけてたんです。もちろん、相手が無謀なふるまいに出ればどうしようもなかったわけですけど。

——中産階級といえどプロフェッショナルたちの集まりですよね、そこには弁護士やあるいは公安関係者もいた？

連 ええ。今、ぼくが中国のこういつた公民運動はエコロジーに絡む問題から始まるだろうと言うのは、今回のアモ

イのPX工場反対活動、環境保護のような活動は社会全体の最大多数の同意を得やすいから。政府内部の間人もアモイ市民なんです。市の（共産党）委員会書記などは数年すればどこかに異動していきますが、政府内で働いている職員は絶対多数は代々ここで暮らしているから、心の中では（工場建設に反対を唱える）あの人たちに賛同していた。ここが重要なんです、単純な理念的な対抗とはわけが違います。

たとえば、「自由を、民主を！」と叫ぶ人たちがいても、政府システム内の人には支持してはくれません。あなたの利益が彼らと対立するからです。だから、逆に多くの人たちが関心を寄せることのできる利益点を見つけ出すまでは、どこの都市もみんな砂の集まり……それが社会の正常な状態なんだと思います。なにか喫緊の出来事にぶつかるまではみな砂のようにそれぞれに生活している。環境問題がこの街の住民の多くの注目を集めたのは、誰しもそれから逃れることができなかったからです。

だから六月当時、政府職員たちは仕事に消極的な態度を取るようになり、この事件への対応にしても非常に消極的な対応で、決して熱心というわけではなかった。というのも、彼らは（「散歩」に参加した）あの人たちが彼らの利益をも代表していることを知っていたからです。彼らは（オフィスから）出てくることはできなかったの、（彼らに

賛同する。でもわたしは表立って彼らを支援できない」という気分を引き裂かれていた。だから彼らは自分の仕事を消極的に処理したんです。

——その後、建設計画が中止されたのも、やはりそんな人たちがアモイ市民としての心で、政府があなたの方の期待に沿うように後押ししたのでしょうか？

連 はつきりとした証拠はありませんが、そういった要素はきつとあると思います。

さらに、ぼくはその後ちよつとおかしなことに気がついた。たとえば、六月一、二日の大規模なデモに、政府……中央政府の宣伝管理当局が「報道してはならない」という明確な指令を出さなかった。これは非常に、非常にまれなことです。いつもならこういった事件が起こると、国内メディアで目にすることはできません。中央宣伝部は必ず「報道してはならない」、「新聞に載せてはならない」という指令を下すのに、それが起こらなかった！ これは非常に非常に興味深く、観察に値する点でした。

——つまり、アモイ市政府だけではなく、中央政府も……

連 あの事件はきつと後になってから中央政府が主導権を握り、地方政府の権限を離れてしまったんだと思います。ぼくは事件後半年間、「なぜ中央政府がこんな民間パワーに注目するのだ？」と観察を続けた。

ぼくが思うに、大きな前提となったのは中国の自然環境が壊滅寸前だということでしょう。現実に昨年一年間、アオコの大量発生だとか、温室ガス排出問題では中国政府は国際社会で矢面に立たされたし、各地でも大規模な環境災害が続いた。そこで、これ以上環境を変えていかなければ、すべてのものが崩壊してしまうことにはつきりと気づいた。しかし、どうやってこの問題を解決するのか彼らにも道が見つからない。

というのも、現在の地方政府は、経済建設においては特に、まったく中央政府の号令を聞かなくなっているからです。たとえば、公害が深刻なプロジェクトが建設されても、中央政府はまったく手も足も出ない。だから彼らはこのような公民のパワーが、もしかしたら地方政府を押しとどめる非常に力強い方法になるかもしれないと注目したのでしよう。今も引き続き、それを観察していると思いますよ。

つまり、六月一日の一般市民のデモが彼ら（アモイ政府）に建設中止を決定させたのではなかった。彼らはそれほど容易には市民に屈服しません、そんな簡単な話ではない。だから、ぼくは物事つて無数の偶然性が絡まってきているんだなあ、と。もし、中国の環境汚染がそこまで行っていないければ、市民が環境の権利を求めたところでバカにされて終わっていたことでしょう。

——ということとは、いわゆる「公民」とか「公民の権利」、「環境」はまだまだ全面的に受け入れられているわけではない、ということ？

連 全面的に受け入れられるにはまだもつと時間がかかるでしょう。というのも、この政府は構造的に公民たちやそんな公民たちの活動に不安を感じているんですから。

もし彼らが全面的にそれらを受け入れたとすれば、その政治システムが徹底的に変化したことを意味する。(今は)彼らは二つの策略を同時に弄しているだけ。どこかで「散歩」が起これば、まずそれを否定し攻撃する。そしてそのうちの要求の一部だけを取り上げる、といった具合に。彼らは決して市民に同意したり、それを認めたりしません。

——でも、社会的にはアモイは公民社会のリーダー格とみなされています。それは市民にどのような影響を与えているのでしょうか？

連 重要なのはそれぞれの心に与えた影響でしょうね。参加者たち、発言者たちのすべてが自分のパワーを感じ、「ぼくがこの都市の運命を変えた！」と考えた。ほとんどすべての参加者たちがそういう、パワーと社会を変ええるという気持ちがあったはずです。

しかし、そこから今後、彼らがどんなふうに社会の問題に関わっていくのかという点については、ぼくは今のところ

ろ彼らはそんな行動はとらないだろう、と感じています。

これまでも中国の公民運動はほとんど緊迫状態において初めて出現した。それは結局のところ、一般の人たちに高いコスト、高いリスク、大きな精神的プレッシャーを強いるからです。

——つまり、西洋社会が期待する「中国民主社会の出現」はそれはど早くはない？

連 早くはありません。今年の状況を見ても明らかです。チベット事件、オリンピック聖火リレー、地震などで、どれも政府はこれまでと同じ方策を取ってきた。つまり、振り返ってはならない、語ってはならない、あれもこれもダメ……ほら、おなじでしょ？

——PX反対運動を経たからのあなたはチベット事件、聖火リレー騒ぎ、そして地震という全国的な事件において、どのような気持ちでこれら的大波に対応したのですか？

とくにチベット事件では、あなたはチベット族の女性からのメールを手始めに、多くの読者からのメールをブログに掲載して読む人に自由に書き込みをさせた……そして一連の民族問題に関する問答を引き起こした。すばらしかったです。

連 あの時、ぼくは自分のブログを個人のメディアにしたいと考えたんです、ぼくはメディア人ですからね。実際

に、PXから現在に至るまで多くのやり方は変わっていません。ぼくは読者にぼくのところだけで得られる情報を提供したい。PX事件ではアモイの読者はどの新聞からも情報を得ることができなかった。そこでぼくはブログで次々とその方面の情報を流し続けた。たとえばPXとはなにか、専門家はどうか考えているのか、ぼく自身はどう思うか。

チベット事件も同じです。ぼくはそこをさまざまな声が発言できるプラットフォームにしたかった。そこに次々とメールが届いたのは彼らがそのメディアを信じ、ぼくという人間を信じたからです。チベット族女性のメール以降届いた一連のメールはつまり、現実生活において多くの人々が発言したがつていることを意味した。そして、蒙古族、朝鮮族……メールの内容もすばらしかった。つまり、この社会には民族問題、社会的生存の問題が存在する。しかし彼らには発言する場が与えられず、発言できなければ大規模な衝突に行きつくのは当然のこと。

チベット問題とは何なのか？　そこではぼくの声なんて意味はありません、だつてぼくだつてチベット問題についてそれはど理解しているわけではないので。しかし、一人のメディア人として一つのプラットフォームを提供する、そしてぼくのそのブログには一日四、五万人がアクセスしている、それを一つのメディアに仕上げることならぼくには

できる。

メディアの目標は人々にさまざまな声を届けることであり、メディアが規制管理されている国においてはそんなメディアにこそ価値がある。しかし、この社会の進歩にはどれほどの時間がかかるのか？　公民社会の形成にどれだけの時間がかかるのか？　中国の政治はいつになったら文明的になるのか？　それは多くの関心外です。予測したところで当たらないだろうし、多くの場合予測できない。

一人のメディア人としてできることは最も積極的に、最も繊細になること。「あ、チベット事件だ！」でチベット事件の真相を伝える。地震が来たら、被災の真相の一部を伝える。次に何かが起こっても、またそれがどんなことなのかを伝える声を届けることでしよう。ぼくはこんなふうに続けていくしかない。事件のたびごとにゆつくりと。それだけを目指しています。

——さまざまな事件を経て、今後中国人、とくに中産階級はどのように世界を見るようになるのでしょうか？

連 中国と世界の融合という大きな流れは変わらないと思います。チベット事件が唯一世界に示したのは、中国にとって国家統一は非常に大きな問題であり、チベットの独立は選択肢ではありえないということでした。そして中産階級はだんだん相対的な文明、いわゆる普遍的価値観を受け入

れるようになる、これは変わらないでしょう。

中産階級というのは最も普遍的な価値のもとで育つてきた人たちで、彼らはそれに頼って生きている。ああいった民族問題に触れた時、それは彼らの現実の生活と乖離したものであるため、ある種の狂信的な、非常に感情的に激しい状態になり、「永遠にダメだ!」とか「とにかく反対!」、「チベット独立なんてことは絶対にありえない!」などという態度を示してしまう。そこから現実の生活に戻ると、彼らは普遍的な価値観こそが最も大事であり、ビジネスをするにしても、何かを語るにしても、実際に彼らがネットサーフィンで情報にアクセスするにしても、「自由」こそが良いものであり、発言権を持つことは良いことだと感じている。それはそういったものが我われの生活の細かい部分にまでしつかり浸透しているからです。

しかし、民族主義は一般に浸透しておらず、チベット問題のように激しい感情的なものでそれを爆発させ、燃やす必要がある。ぼくはオリンピック開催中にまた民族問題が出現するのではないかと考えています。中国人は自信過剰になって、自分がすごいんだと思うでしょうから。

——となると、その後は?

連 それが過ぎれば雲散霧消してしまいますよ。消えてしまえば人々はまた通常の生活に戻る、まるで熱が冷めたみ

たいにね(笑)。ぼくはそんなことはますます減っていくだろうと楽観しています。たとえばおいしいフランスのワインを飲めば、どんなに中国とフランスとの関係が緊張していようとも「うまい」と思えるようになるでしょう。

——そんなに簡単ですか?

連 簡単なことなんですよ! たとえば、中国と日本だって中国人は非常に日本を憎んでいるというけれど、日本のアニメを観るとおもしろいと感じる。中国の青年は誰もが日本のＡＶを観ているし、武藤蘭が大好き。武藤蘭はあんなにきれいなのにすばらしいＡＶを撮るなあ、てね。そこに共通認識が生まれる。

簡単なことです、生活ってそんな些細なことが安心感を与えてくれるものだから。理念じゃダメなんです、一時的なものですから。特に今は情報コミュニケーションがスビードアップしている。人と人との憎しみはそこに距離がなくてはずならず、相手を常におどろおどろしく語って初めて相手を憎めるようになる。それが今ではそんな情報のミゾがゆつくりと埋まりつつあるんです。

たとえばどんなに日本人、あるいはフランス人を憎んだとしても、多くの情報を通じて「あの国はどんな国なんだろう?」、「あの国にはいっぱいぼくの好きなものがある!」となれば、そんな単純な恨みは必要なくなります。だから

情報が速くなればなるほど、人々が憎しみ合うことは難しくなる。特に二つの国、二つの民族がいがみ合うことはますます難しくなっていくことでしょう！

（二〇〇八年六月／撮影〓黄大智）

※当テキストの複製・印刷・改変を禁じます